

## 万博 拙速甘い試算

写真は毎日 27 日社会面。重要な内容なので抜粋して紹介したい。2025 年大阪・関西万博で大阪府や大阪市が出展するパビリオンの工事建設費が当初の試算から 25 億円増え、99 億円に上振れすることになった。それまでも費用は二転三転しており、府市の見積もりの甘さが露呈した。背景を探ると、万博の成功が旗印となって公費支出に歯止めがかからない構造が見えてきた。

つまりきは、設計段階からあった。府市は 21 年 10 月に設計業者を公募し、応募があった 5 社を森下氏（森下竜一・大阪大寄附講座教授、パビリオンの総合プロデューサー）ら選定委員が審査。その結果、三角形が組み合わさった鳥の巣のような屋根を特徴とした東畑建築事務所の提案が 100 点満点中 95.85 点の最高評価で選ばれた。関係者によると、費用は評価項目ではなかったが、審査で選定委員が予算内（70 億～80 億円）に収まるか確認したという。東畑建築事務所は契約後、建設工事費を 74 億円と試算した。府市もその内容を確認し、建設工事を担う業者の公募を 22 年 5 月に始めた。

一方で府市によると、この時の確認作業は資材の数量や単価に間違いがないかなどをチェックする形式的なもので、金額の妥当性に踏み込んでいなかった。関係者は「万博の開幕に間に合わせるため、ギリギリの日程で作業が進んでいた」と語る。工事業者の公募には 2 社が応じたものの、うち 1 社は「工期が間に合わない」と途中辞退した。残った大手ゼネコン・竹中工務店が半ば自動的に優先交渉権を得たが、ここで府市に想定外の事態が起きた。竹中工務店が提示した見積もりは 195 億円で、試算を 121 億円も上回っていた。

特に大きな乖離があったのが、パビリオンの「顔」となる屋根の建設費だった。ガラスや木材を組み合わせて鳥の巣のようにし、上から水が流れる構造で、試算では 15 億円だったが、竹中工務店は 74 億円と算出。屋根だけで全体の試算と同額だった。府市の担当者によると、約 6700 枚のガラスと、加工した木材や鋼材を組み合わせる作業に手間がかかるのに、試算ではこうした点が反映されていなかったという。さらにウクライナ危機の影響でガラスや鉄など資材価格が高騰したことも費用を底上げした。

見直しを迫られた府市は、屋根のガラスを安価で透明な膜に変更し、屋根の規模も縮小することを決めた。建設費は 115 億円にまで圧縮されたが、それでも 41 億円の追加費用が必要になった。こうした経緯に府市の議会では批判が相次いだ、「1 社だと競争が働かず、適正価格が分からない」と複数の市議から公募のやり直しを求める声が上がったが、府市側は万博に間に合わせるには 11 月末までに資材を発注する必要があるとして竹中工務店との契約を進める考えを示した。



(2022 年 12 月 1 日)